

瀬祭書屋主人著

叢書

瀬祭書屋俳話

全

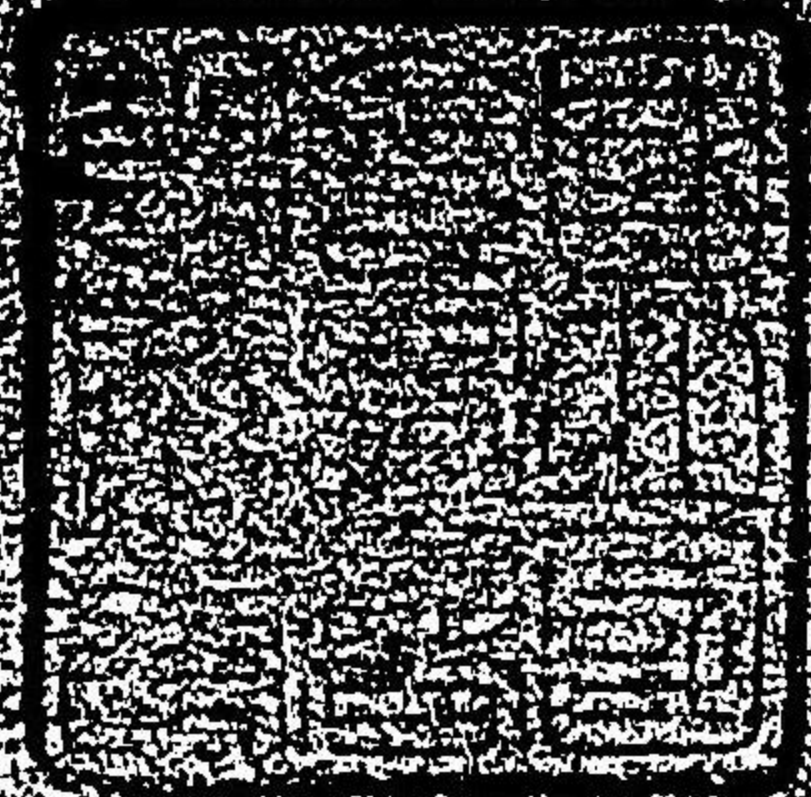
發兌 日本新聞社

911.304M 214d

癡祭書屋俳話小序

老子曰く言者は知らず知者は言はずと還初道人曰く山林の樂を談ずる者未だ必ずしも眞に山林の趣を得ずと政治を談ずる者政治を知らず宗教を談ずる者宗教を知らず英佛の法を説き獨露の學を講ずる者未だ必ずしも英佛獨露を知らず文學の書を著し哲理の説を爲すもの未だ必ずしも文學哲理を知らず知らざるを知らずとせず而して之を口に之を筆にし以て天下に公にす知者は之を見て其謬妄を笑ひ不知者は之を聞いて其博識に服す故に之を談ずる者愈多くして之を知る者愈少し余も亦俳諧を知らず而して妄りに俳諧を談ずるものなり

義に『日本』に載する所の俳話積んで三十餘篇に至る今之を輯めて一卷と爲さんとす乃ち前後錯綜せる者を轉置して稍々俳諧史、俳諧論、俳人俳句、俳諧批評の順序を爲すといへども固と隨筆的の著作條理貫通せざることも多し況んや淺學寡聞にして未だ先輩の教を乞ふに違あらざれば誤解謬見亦應に少からざるべし知者若し之を讀まば邪正の勞を



260942

賜へ若し夫れ俳諧を知らざる者に至りては知らずして妄りに説を爲す者の言に惑ふ莫れ

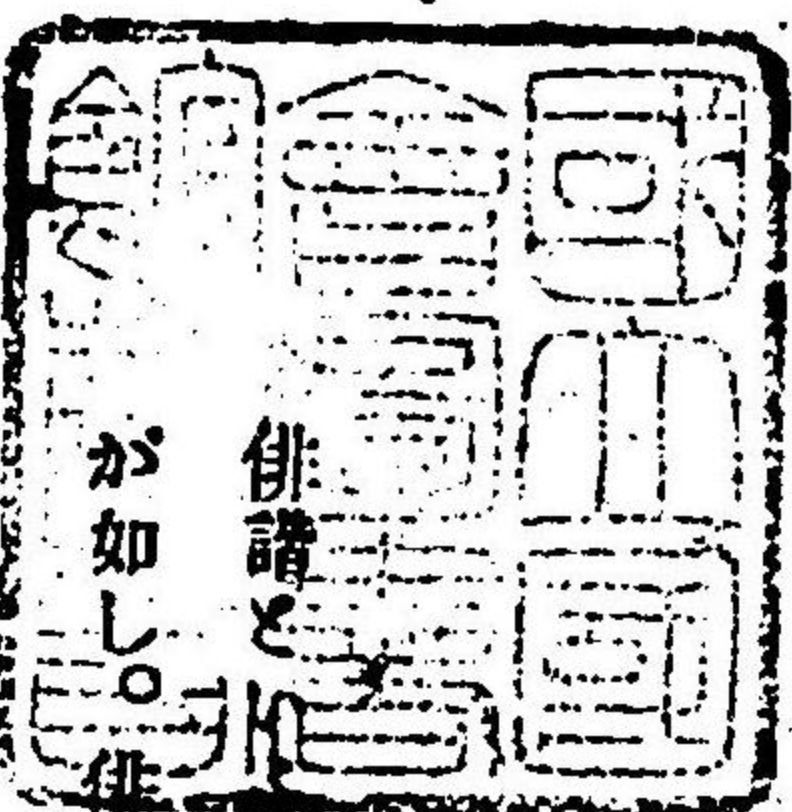
明治廿五年十月廿四日

瀬祭書屋主人識

二

瀬祭書屋俳話

瀬祭書屋主人著



俳諧といふ名稱

俳諧といふ語は其道に入りたるもの、平生言ふ意義と一般の世人が學問的に解釋する意義と相異なるが如し。俳諧といふ語の始めて日本の書に見えたるは古今集中に俳諧歌とあるものこれなり。俳諧といふ語は滑稽の意味なりと解釋する人多く其意味に因りて俳諧連歌俳諧發句と云ふ名稱を生じ俗に又之を略して俳諧と云ふ。されど芭蕉已後の俳諧は幽玄高尚なる者ありて必ずしも滑稽の意を含まず。ここに於て俳諧なる語は上代と異なりたる通俗の言語又は文法を用ひしものを指して云ふの意義と變じたるが如し。然れども普通に俳諧社會の人が單に俳諧とのみ稱する時は俳諧連歌の意にて云ふものなり。而してこれと區別して十七字の句を發句といふが通例なれども「俳諧を學ぶ」とか又は「俳諧に遊ぶ」とか云ふが如き場合には必ずしも俳諧と發句とを區別せずして兩者を包含する程の廣漠なる意に用ふる事も少からず。斯くて終に局外の人をして往々迷を生ぜしむるとあり。(余は世上の俳諧仲間に変はりしとなれば場處によりて其意義に相違あるや否や詳しきとは知らず)

因に云ふ。芭蕉又は其門弟等が俳諧は滑稽なりと稱する其滑稽といふ語は余が前に述べたる滑稽即

ち通俗世人が用ふる滑稽に非ず。只和歌の單一淡泊なるに對して其雅俗の言語混淆し其思想の變化多くして且つ急劇なるを謂ふのみ。

二

連歌と俳諧

俳諧の連歌より出で連歌の和歌より出でたるは人の知る所なり。其始めは一首の歌の上半下半を二人して詠みたる程のものなりしが後には歌の上半即ち十七文字だけを離して完全の意味をなすに至れり。されど足利時代に在りては猶其趣和歌の上の句の如くにして上代の言語を以て上代の思想を叙するに止まれば其文學として讀者を感ぜしむるの度は在來の和歌に比して却て之に劣るものといふべし。且つ此時代の發句は所謂連歌の第一句にして敢てそれ許りを獨立せしめて一文學となす譯にあらねば其力を用ふる事も随つて專一ならず。之を讀めば多少の倦厭を生ぜしむるの傾きあり。松永貞徳徳川氏の初めにいで、連歌に代ふるに俳諧を以てせしより發句にも重みの加はりしか共其發句は地口しやれ謎等の滑稽に過ぎざれば文學上の價值に至りては足利時代に比して更に一層の下落を來したりといふも酷評には非ざるべし。貞徳派千篇一律にして竟に新規なる思想も出でざりしかば宗因等起つて檀林の一流を創り一時は天下を風靡せしがこれ亦稍々發達したる滑稽頓智に外ならざるを以て忽ち芭蕉派の壓倒する所となりて今日に至る迄猶有るか無きかの有様なり。芭蕉は趣向を頓智滑稽の外に求め言語を古雅と卑俗との中間に取り萬葉集以後新に一面目を開き日本の韻文を一變して時勢の變遷に適應せしめしを以て正風俳諧の勢力は明治の世になりても猶依然として隆盛を致せるものなるべし而して芭蕉は發句のみならず俳諧歌連にも一様に力を盡し其門弟の如きも猶其遺訓を守りしが後世に至りては單に十七文字の發句を重んじ俳諧連歌は僅に其附屬物として存するの傾向あるが如し。

延寶天和貞享の俳風

足利時代の連歌より芭蕉派の俳諧に遷るに貞徳派檀林流等の楷梯を經過したる事は前に述べたるが如し。然れども猶細かに之を觀れば其間無數の楷梯と漸次の發達とを経來りしものなり。寛文十二年撰べる貝あはほほといふ書は芭蕉未だ宗房といひし頃編輯せし者なりといへども猶赤子のかた言まじりにしやべるが如く終に談林を離るゝと能はず。延寶八年に其角杉風がものせる田の舎の句の合の、常盤屋句合は稍其歩を進めたるに相違なきも未だ小學生徒が草したる文章を觀るの思ひあり。天和三年に刊行せし虛栗の集のに至りては著るしく俳諧の一時代を限りしものにて其魂は既に正風の本跡を得たりといへども其詞は猶甚だ幼稚にして暴露の嫌あるを免れず。貞享四年刊行の續虛栗のは更に幾多の進歩をなして殆んど正風の門を覗ふ者と謂ふべし。同年の吟詠ある四季句合の載せて元祿元年刊都筑の原のありは滑稽に陥らず奇幻を貪らず景を自然の間に探り味を淡泊の裏に求めはじめ正風の旗幟を樹立したるも

三

のなり。(されど此四季句合の中には芭蕉翁一派の門弟ならざるもまじれり) 其後曠野、其袋、猿、猿、等續と世に出で、終に芭蕉の功名をして千歳に不朽ならしめたり。此間の楷梯となりたる貞徳派をはじめ虚栗、續虚栗に至るまで終に此正風を發揮せしむるの段階に相違なしと雖其間或は退歩したるとなきにもあらず。是固より何事の發達中にも免るべからざる運命なるべし。明治の大改革ありてより文學も亦過劇の變遷を生じ翻譯文、新體詩、言文一致等の諸體を唱ふるものありて大に文學界を騒がし其極世人をして其歸着する所を知らず竟に多岐亡羊の感を起さしむるに至れり。然れども天下の大勢より觀察し來れば是等も亦文學進歩の一段落に過ぎずして後來大文學者として現出する者は必ず古文學の粹を抜き併せて今日の新文學の長所をも採取する者なるべく而して是等は皆元祿時代に俳諧の變遷したると同じと思はるゝなり。

足利時代より元祿に至る發句

天下稍々檀林の俗風に厭くに際して機敏爛眼の一人實井其角は別に一新體を創して世人を驚かさんと企てたり。然れども俗語を用ひて俗客の一笑を買ふが如きは則ち前車の覆轍を踏むに等くして到底之れを傲ふべからず。さりとて和歌的連歌の句法を學ぶは陳腐にして復一個の新題目を加へ一種の新思想を叙述するに地なし。是に於て其角は之を漢土の詩に求めて始めて始めて一種の新體を成せり。田舎句

合虚栗續虚栗の如きは即ち此流の句集とも謂ひつべし。今、古來の發句に付きて變遷の一斑を知らしむる爲に左に時代の順序に従ふて時鳥を詠せし數句を擧げん。

待てばこそ鳴かぬ日もあれ時鳥
 待たで見ん恨みてや鳴く不如歸
 あくといふ文字は無の字か郭公
 一疋も音は萬疋そほとゝぎす
 啼きさわげ日本つゝみの無常鳥
 鐘カヽヽ驚破時鳥草の戸に
 半日の下戸閑居にたへず郭公
 時鳥背に星をすたるたか嶺かな
 朝顔の二葉にうれしほとゝぎす
 馬と馬よばりあひけり不如歸
 時鳥鐘つくかたへ鳴音かな
 郭公何もなき野の門構へ
 時鳥顔の出されぬ格子かな

道 譽(菟玖波)
 實 隆(新筑波)
 春 庵(鷹筑波)
 失 名(毛吹草)
 政 定(貝か對ひ)
 其 角(田舎句合)
 千 春(虚 栗)
 暮 角(續虚栗)
 調 柳(都筑の原)
 鈍 可(あら野)
 湖 水(其 袋)
 凡 兆(猿 袋)
 野 坡(嵐 俵)
 五

俳書

連歌俳諧の撰集は足利時代に在りても菟玖波集(紀元二千十六年撰)以後稀れに之れ有りといへども多く刊行せしものにあらず。寛永年間に至りては編集せる書も多く且つ之を刊行せしものなれば時世の進歩と共に俳諧の盛運に赴きたるを見るべし。正保慶安承應明暦萬治寛文の間は大第に著作の多きを加ふといへども其の著るしく増加したるは延寶年間なり。余は特にこれか研究をなしたることなければと見當るまゝに書き付けたる者のみにても延寶年間の編著已に五十部になんくといふ。就中尤も多きは延寶八年にして其の目を擧ぐれば

俳硯 軒端の獨話 洛陽集 向の岡 伊勢宮笥 西鶴大矢數(刊年は天和元年) 花落六百句

猿蓑 阿蘭陀丸二番船 江戸大坂通し馬 俳諧江戸辨慶 破邪顯正返答 田舎句合 常盤屋句合 等にして猶此外に數多の著作あるべきなり。余淺學未た是等の書の過半は一覽だになし得ずといへ前後の時勢より察するに多くは皆片々たる一小冊子に過ぎずして敢て後世數卷を一部として發行するものと同時に論ずべくもあらざるべし。しかはあれど如何なる小冊子ありとも二百餘年以前に在りて此くの如く多きを見るは其盛運を下するに十分なりと信するあり。天和貞享を経て元祿に至り愈々其

種點に達したるが如く寶永正徳享保の間に下りては刊行の俳書いたく減し盡し唯東華坊支考が十數部の著書あるのみとはなれりけり。是時に際して俳諧は暫時衰運の暗黒界に埋没せられたるの觀ありて芭蕉の英魂は其の死後二三十年に於て已に其靈威を失ひ盡したるが如し。

字餘りの俳句

俳句に字餘りの多きものは延寶天和の間を尤甚しとす。十八九音の句は云ふに及ばず時として二十五音に至るものありて却つて片歌よりも猶長し。今日にありて之れを見れば奇怪の觀なきに非ざれども俳風變遷の楷梯としては是非とも免るべからざるものならんか。今廣く古人の句中より其格調の異なるもの數句を取りて列舉せん

天にあまぎ地に伏し待ちの月夜哉	立	圃
古寺月なし狼客を送りける	北	銀
しほらしき物つくしちよろ木かいわり紫	杉	風
鶴やさえわたる橋の夜半の月	宗	長
夏衣いまだ風をとりつくさず	西	燕
あれよくといふもの獨り山櫻	枳	風

五月雨けりな小田に鯉とる村童
 月の秋に生れいづるや桂男
 離丸が夫婦や桃の露不老國
 ところてんさかしまに銀河三千丈
 五月雨の端居古き平家をりなり鳥
 月に親しく天帝の媚に成たしな
 曙の人顔牡丹霞に開きけり
 新年の御慶とは申しけり八十年
 有徳なる物沙干の濁なる大きな綱
 櫻莖弱如何なる人の何を以て櫻
 玉祭る里や檜刈男香爐たぐ女
 流るゝ年の衰世につくも髪さへ漱捨つ

唐句 重頼 羊角 蕪村 嵐雪 才丸 杜國 任口 由ト 杉風 松濤 其角 芭蕉 杉風 芭蕉

等の如し。又十七音にても五七五の調子に外れたる者あり例へば

暑もる水木くらげの耳に空ッ
 雪の鱧ま左さ水無月の鯛

海くれて鴨の聲はのかに白し

芭蕉

等の如し。

俳句の前途

數學を脩めたる今時の學者は云ふ。日本の和歌俳句の如きは一首の字音僅に二三十に過ぎざれば之を
ハイネン錯列法に由て算するも其數に限りあるを知るべきなり。語を換へて之をいはく和歌(重に短歌をい
 ふ)俳句は早晚其限りに達して最早此上一首の新しきものだに作り得べからざるに至るべしと。世
 の數型を解せぬ人はいと之をいふかき説に思ひ何でうさる事のあるべきや。和歌といひ俳句といふ
 もど無數にしていつまでも盡くるとなかるべし。古より今に至るまで幾千萬の和歌俳句ありとも皆其
 趣を異にするを見ても知り得べき善なるは杯云ふなり。然れども後説はもと推理に疎き我邦在來の文
 人の誤謬にして敢て取るに足らず。其實和歌も俳句も正に其死期に近づきつゝある者なり。試みに見
 よ古往今來吟詠せし所の幾萬の和歌俳句は一見其面目を異にするが如しといへども細かに之を觀廣く
 之を比ぶれば其類似せる者眞に幾何ぞや。弟子は師より脱化し來り後輩は先輩より剽竊し去りて作爲
 せる者比々皆是れなり。其中に就きて石を化して玉と爲すの工夫ある者は之を巧とし糞土の中よりう
 ち虫を掘み來る者は之れを拙とするのみ。終に一箇の新觀念を提起するものなし。而して世の下るに

十
従ひ平凡宗匠平凡歌人のみ多く現はるゝは罪其人に在りとはいへば和歌又は俳句其物の區域の狹隘なるによらずんばあらざるなり。人間ふて云ふ。さらば和歌俳句の運命は何れの時にか窮まるぞ。對して云ふ。其窮り盡すの時は固より之を知るべからずといへども概言すれば俳句は已に盡きたりと思ふなり。よし未だ盡きずとするも明治年間に盡きんと期して待つべきなり。和歌は其字數俳句よりも更に多きを以て數理上より算出したる定數も亦遙かに俳句の上にあらずといへども實際和歌に用ふる所の言語は雅言のみにして其數甚だ少なき故に其區域も俳句に比して更に狹隘なり。故に和歌は明治已前に於て略ぼ盡きたらんかと思惟するなり。

新題目

人或は云ふ人間の觀念は時勢の變遷と共に變遷する者なり。そは古來文學の變遷と政治の變遷とを比較して知るべきなり。而して明治維新の如く著るしく變遷したるとは古より其例少なく従つて文學上の觀念も亦大に昔日と異なるが如し。單に外部の皮相のみより見るも今日の人事器物は前日の人事器物と全く同じからず。刀槍廢れて砲礮天に響き籃輿は空しく病者の乗りものとなりて人車馬車氣車王侯庶人を乘せて地上を横行す。是等の奇觀は到る處にありて枚擧に遑めらす。此新題目此新觀念を以て吟詠せんか和歌にまれ俳句にまれ其盡くる所あるべからずと。對して云ふ。そは一應道理ある說なれ

ども和歌には新題目新言語は之を入るゝを許さず。俳句には敢て之を拒まずといへども亦之を好むものにあらず。こは固より理の當然にして徒に天保老爺の頑固なる僻見より出づるもののみ思ふべからず。大凡天下の事物は天然にても人事にても雅と俗との區別あり。雅俗の解はこゝに述べず通常世人の唱ふる所に従ふて大差なかるべし。而して文明世界に現出する無數の人事又は所謂文明の利器なる者に至りては多くは俗の又俗陋の又陋なるものにして文學者は終に之を以て如何とも爲し能はざるなり。例へば蒸氣機關なる語を見て我々が起す所の心象は如何。唯精細にして混亂せる鐵器の一大塊を想起すると共に我頭腦に一種眩暈的の感あるを覺ゆるのみ。又試みに選舉競争懲戒裁判等の言語を聞きて後に如何なる心象を生ずるかを見よ。袖裡黄金を溢らせて低聲私語するの遊說者と思ひ内であれば覺えず微笑を取り落したる被說者と兩々相對するの光景に非ざれば則ち髯公解語の花を擲つて席上に落花狼藉たるの一室を畫き出さんのみ。此妄想に續きて發するものは道德墮頹秩序紊亂等の感情の外更に一の風雅なる趣味高尚なる觀念あるべきやうなし。人或は云ふ美術文學は古に盛にして今に衰へたりと。以あるかな。

和歌と俳句

主人小厮店の一隅に立ちて他の髪を結び月代を剃る。八公鹿公傍に在り。相對して坐す。八公叫んで

曰くしめたりしめたりと。熊公頭を垂れて一語なし。甲公乙公各々語りて曰く桂馬を以て王を釣り出すべし。曰く王頭の歩兵を突くべしと。器々市場の如し。是れ髪結床に將棋を弄するなり。九霞山樵の山水一幅を掛けて下に池坊流の立花一瓶をあしらふ。庭間に松石相雜りて盆池青き處金魚尾を搖かす籠鳥一二盆栽三四皆な雅趣あらばるはなし。而して主客兩々笑はず語らず時に丁々の聲あるのみ。是れ別墅の竹房に碁を圍むの光景なり。

横町へ少し曲りて最合井釣瓶繩朽つるの邊畫顏詩かぬ種をはへたるこなたの掃溜に臨みて竹格子まばらなる中にみいちやんお花ちゃんを相手にして破れ三味線を鳴らす。絃聲板橋を踏み轟かすが如く歌聲犬の遠吠に似たり。裏店の奥比々此類なり。玄關深く見こみて磬石遠く連り車馬門に滿ちて小唄式黨に迎ふ。左の方一帯の板屏を見越して春色爛熳たり。晚梅早櫻相交るの間玉欄屈曲して玻璃窓中佳人瑤琴を彈ず。珠玉盤上を走り幽泉岩陰に咽ふ。鶯腔稍々澁なとり雖も終に百鳥の群鳴に勝る。

甲店の伴當倉皇として街上を走る。乙肆の主、管袖を扣へて止めて曰く僕前日大坂の募集に應ず。入花料殆んど五十銭を費す。而して一句の賞點に入るなし何事の胸わるさぞ。甲曰く前月の卷已に成るや否や。乙曰く知らず。一行商傍に在り曰く彼卷已に開きたり。天は某。地は某なり。我句幸にして十内に在り云々。甲乙皆失望の体あり。俳句を弄するもの皆此流の人。一侯一伯會々相逢ふ。侯曰く前月の歌會貫下秀歌を詠ず。一坐感賞して三代集中のものとせり。健羨の至りなり。伯曰く敢て當らず

今夜某々を弊家に召して萬葉の講筈を開く。幸に櫻を枉げられよ云々と和歌を詠ずるは此種の人なり。嗚呼何ぞ將棋、三絃、俳句の相似て碁、箏、歌の相類するや。前者は下等社會に行はれ後者は上流社會に行はる。前者は其起原新らしく後者は其起原古し。新し故に俚耳に入り易し。古し故に雅客の興を助く。將棋盤は碁盤より狭く而して其手碁より多し。三絃の絃は箏より少く而して其音箏より多し。俳句の字は歌より短く而して其變化歌よりも多し。變化多ければ奇警斬新の事をなすべし。唯卑猥俗陋に陥るの弊あり。變化少ければ優美清淡の味あり。唯陳套を襲ひ精粘を容むるの職を免かれず。随つて將棋、三絃、俳句は入り難く碁、箏、歌は入り易し。入り難けれども上達し易く入り易けれども上達し難し。此の六技は蓋し奇對といふべし。

寶井其角

蕉翁の六感なるものに六弟子の長所を評するの語あり。されども其語簡單にして未だ盡さざるのみならず往々其要を得ざるものあれば漸次にこれが略評を試みんとす。初めに其角を評して「花やかなる事其角に及ばず」といへり。其角の句固より花やかなる者少からず。例へば

鶯の身をさかさまに初音かな
白魚をふるひよせたる四ッ手かな

等の如し。然れども其角一生の本領は決して此婉麗細膩なる所にあらざりて却りて傲兀疎宕の處性奇斬新の處諸百出の處に在りしことは五元集を一讀せしもの、能く知る所なり。其傲兀疎宕なる者を擧ぐれば左の如し。

鐘一ツうれぬ日はなし江戸の春

夕涼よく予男に生れける

小傾城行きてなぶらん年の暮

其角は實に江戸ッ子中の江戸ッ子なり。大盃を滿引し名媛を提掣して紅燈綠酒の間に流連せしことも多かるべし。されば芭蕉も其大酒を誦めて「舞に我は飯喰ふ男哉」といひし程の強の者なれば是等の句ある固より怪しむに足らず。而してこれ即ち千古一人の達吟たる所以なり。其性奇斬新なる者は

世の中の榮螺も鼻をわけの春

枇杷の葉や取れば角なき蝸牛

初雪に此小便は何やツテ

等の如し。是等即ち巧者巧を弄し智者智を逞ふる所にして其角が一吟人を瞞着するの手段なり。されば座上の即吟に至りては其角の敏捷一座の喝采を博すること常に芭蕉に勝れたりとかや。其諸百出

人頤を解するものもまた才子の餘裕を示し英雄の人を歎むく所以なれば其角に於てこれ無かるべけんや。例へば

こなたにも女房もたせん水祝ひ

饅頭で人を尋ねよ山櫻

みつつくの頭巾は人に縫はせけり

等の如し。然れども多能なる者は必ず失す其角の句巧に失し俗に失し奇に失し豪に失する者少からず而して豪放送宕なる者は常に暴露に過ぐるの弊あり。其角句中其骨を露はす者を擧ぐれば

吐かぬ鵜のはむらに燃ゆる箒哉

二星私かに懐む隣の娘年十五

此秋暮文覺我を殺せかし

杯あり。扱又其角句中一種の澹雅穩整なる文字ありて其調稍嵐雪越人に近きが如し。例へば

あくる夜のほのかにうれし嫁が君

明星や櫻定めぬ山かつら

秋の空尾の上の杉にはなれたり

杯にして前に送らぬし十數句とは其の趣いたく變れり之を要するに其角は豪放にしてしかも奇才あり

奇才ありてしかも學識あり。されば時として豪放の眞面目を現はし時として奇才を弄し學識を現はすなど機に應じ機に適して盤根錯節を斷ずること大根午券を切るが如くなれば芭蕉も之を賞し同門も之に服し終に兒童走卒をして其角の名を知らしむるに至りたり。其角はそれ一世の英傑なるかな。

嵐雪の古調

服部嵐雪は古文を好みしものと見え其作る所の俳句も古音古歌に憑りたるもの多く其語調も亦和歌に似たる者少からず。例へば

口れ椽になつなこぼるゝ土ながら
部あけて葦立買はん朝まだき
石女の離かしづくぞ哀れなる
みる房やかゝれとてしる寺の厄
等の如し。又同人の句に

行燈を月の夜にせんほどゝぎす
といふは世の中へ知れ渡りたるものなるがこは萬葉集にある家持の
保等登藝須許欲奈枳和多禮登毛之備乎

都久欲爾奈蘇倍曾能可氣母見牟

といへる歌をそのまま俗譯せしものにして餘り珍重すべきものとも思はれず。されど俳家者流の宗匠及び其の門弟等は皆學問淺薄なる者のみ多かれはさるとのありとも知らず。よし之れを知る者あれば却つてそを賞讃して古歌にちなみたる名句なりなど云ふこと恰も今日の平凡學者がこは歐洲の學者某の説なりといはれ尤も善き證論なりと思へるが如し。げにも片腹いたきことぞかし。余は此の嵐雪の句よりも

蠟燭のひかりにくしや郭公
越人
提灯の空に詮なし郭公
杉風

服部嵐雪

蕉翁六感の中に「からびたる事嵐雪に及ばず」とあるは適評なるべし。嵐雪の句温雅にして古樸しかも時に從ふて變化するの妙は其角の豪壯にして變化するものと相反照して蕉門の奇觀と謂ふべし。其所謂からびたる句は

梅一りん一りん程のあたゝかさ

相撲取、ならぶや秋の唐錦

賞菊白菊其外の名はなくもかな

の類にして此嵐雪一家の格調は終に他人の模倣し能はざる所なり。

文もなく口上もなし 粽五把

蒲團着て寝たる姿や東山

是等の句は實景實情を有の儘に言ひ放しながら猶其の間に一種の雅味を有するものにして是れ亦嵐雪の獨り擅まゝにする所なり。蓋し嵐雪は一見識ある人なれども稍理想には乏しきものゝ如く隨つて宇宙の事物を観察するに常に其の表面よりするの傾きあり。是を以て其表面的の観察も亦重もに些細なる事物に向つて精密なるが如し。例へば

花に風軽く来て吹け酒の泡

五月雨や蚯蚓の通す鍋の底

白鷺や角に日を持つ鯛牛

の如き其一斑を知るに足るべきなり。猶き此種の観察の滑稽なる者には

顔につく飯粒蠅に與へけり

門の雪白と夏の妻かな

君見よや我手入るゝと莖の桶

あり。又た人情の上に於ける観察も曾て懷遠慘愴の處に向はず、はた勇壯豪放の處に向はずして常に婦女若しくは兒童の可憐なる處に在るが如く見ゆ。そは

ほつくと喉積あらず夫婦かな

石女の離かしづくぞあはれなる

我戀や口もすはれぬ青鬼灯

岡見すと妹つくろひぬ小家の門

出代やをさな心にもあはれ

竹の子や兒の齒莖のうつくしき

等の歌句を見ても知るべきなり。猶此外に

秋風の心動きぬ繩すだれ

の如く稍理想の句なきに非るも終に嵐雪の本色に非ず。又其奇抜なるもの

順禮に打ちまじり行く蹄雁かな

武士の足で米とぐ敷かな

等の類われども其角の變幻極りなきとは大に異なりて却りて味深き處あり。されば嵐雪の變化は其角

の天地に渡りて縦横奔放するの類に非ずして僅かに一小局部内に徘徊するものなれども其雅味を存するの多きは其角も亦一步を譲らざるべからず。宜なる哉「門人に其角嵐雪あり」と並稱せしや。

向井去來

「實なる事去來は及ばず」とは蕉翁六感の中に去來を評するなり。而して此評實に去來を盡すものと謂ふ可し。去來人と爲り温厚忠實其芭蕉に事ふること親の如く又君の如く常に親愛と尊敬とを失はざりしかば芭蕉も亦之を見ること恰も吾愛見の如くにして他の門弟子とは一様に思はざりき。されば芭蕉の去來に向つて或は之を褒め或は之を叱るも皆師の弟子に於ける關係より出でずして親の子よ於けるが如き愛情より發するものなり。去來曾て芭蕉と共に正秀亭に會す。其座の俳諧に去來第三を付けたるに其句宜しからずとて芭蕉これを添削しけるが會はて後芭蕉は去來を叱りて「斯くのびやかなる第三を付くること前句の景色を探らず未練の事なり此度の耻は是非一度雪かんと心かくべし」云々とて夜もすがら怒りたりと。正秀も弟子なり去來も弟子なり。弟子が弟子の前にて仕そこなふたりとて芭蕉に於て何か有らん。然るに斯くまで叱責するとは弟子を以て之を見ず骨肉の如く之を愛するが爲なるべし。去來實に此の如き人なれば其作る所の句も亦優柔敦厚にして曾て輕躁浮泛に流るゝの弊を見ず。其角の如く奇を求め新を探りて人目を眩するのふなく又寸草の如く微を發き理を究りて雅味

を悟るの識なしとて却て平穩真樸の間に微妙の詩歌的觀念を發揮せしが爲に其句を讀む者一たび之を讀すれば終に復忘るゝ能はざるに至る。蓋し其意匠の幽遠に馳せしめて却て高尚なるのみならず、其格調極めて自然にして敢て人工斧鑿の痕なげればなるべし。其景を敘するの處情を敘するの處神理天工、一心一手の間に融會して外面一片の理想を著けず裏面一點の座氣を雜へざるに至りては芭蕉も亦之を摸倣すること能はず。況んや其嵐二子をや。況んや其他の作家を以て自ら任ずる許六、支考の輩をや。試みに其句數首を擧ぐれば

- 上り帆の淡路はなれぬ沙干哉
- 涼しさや夕立ながら入日影
- 乗りながら秣はまかせて月見哉
- 應くともさしと叩くや雪の門
- 芭蕉の鉢叩かんとて落柿舎を音づれけるに折節鉢敲の來ざりければ
- 帯こそせまねて見せん鉢叩

是等の句は皆其句の妙處なるのみならず去來其人の性質躍然として現れたるを見るべし。去來の句今日に傳ふる者僅に二百句許りにして隨ひて一題數句ある者は稀なり。只秋月と時雨の二題は吟詠各十句の多きに及び而して他の些事微物に至りては一句だに無き者少からず。是を以て見るも去來の觀念

は毎に那邊に向ひしかを知るに足らん。又去來は武士なる者の意氣凛然たる所を忘れざりしと見え、これを證するの句多し。

元日や家に譲りの太刀はかん

筭の時よりしるし月の竹

鐘着てつかれためさん土用干

秋風や白木の弓に弦はらん

鴨啼くや弓矢をすて、十餘年

老武者と指やさ、れん玉霰

時として豪壯の氣を帯ふる者あり。然れども終に粗糲に失せず。

湖の水まさりけり五月雨

時として教誨の意を含む者あり。

何事や花見る人の長刀

時として稍、精巧にして奇創なる者あり。然れども其妙味は奇創精巧の處に非ずして却て神韻縹渺自然に渾成する處にあるか如し。

瘦せはて、香にさく梅の思ひ哉

時鳥啼くや雲雀の十文字

卯の花の絶間叩かん關の門

芭蕉曰く上手にして始めて仕そこなひありと。蓋し去來も亦其一人なり。其奇に失する者

年の夜や人に手足の十許り

上臈の山莊に候し奉りて

梅が香や山路纏入る犬のまね

其俗に失する者

賽錢も用意顔なり花の杜

時鳥きのふ一聲けふ三聲

從兄弟に逢ふて

昔思へ一ッ畠の瓜茄子

内藤丈草

僧丈草は犬山の士なり。繼母に仕へて孝心深し。家を異母弟に譲らんとてわざと右の指に疵をつけ刀の柄握り難き由を言ひたて家を遁れ出で、道の傍に髪押し斬りそれより禪門に入る。其時の詩あり。

多年負屋一蝸牛。化做蛤蜊得自由。
火宅最惶誕沫盡。偶尋法雨入林丘。

其後芭蕉の弟子となりて俳句を學びしが斯る心だての大丈夫なればにや芭蕉もいたく之を愛し一人の上立たんことを越ゆべからず」とはじめより喜べりとす。されば丈草も深く芭蕉に懐き其死後も養仲寺のほとりに草廬を結びて一生を終へたり。明和の頃蝶夢なる俳人、去來發句集丈草發句集を編み其端書に記するに蕉風の正統を得し者は去來丈草二子なり。されども此二子は名聞を好まず弟子をも取らざれば後世之を祖述するものなく却りて其角風雪の流派のみ盛に行はれたり云々の意を以てせり。是れ實に去來丈草の知己と謂ふべし。

丈草の俳句を通覽する者は其禪味に富むことを心づかぬ者は非ざるべし。少くとも諸行無常といふ佛教の觀念は常に丈草の頭腦を支配せしものと思しく其種の作句實に多し。併しながら丈草の句は所謂坊主の坊主臭きものにして多くは鼻露に過ぎ稍厭ふべきものあり。之を芭蕉の禪味を消化して一句の裏面に包含せしむるものに比すれば及ばざること遠し。例せば

啄木鳥の枯木探すや花の中
眞先に見し枝ならん散る櫻
雪隠も出て假の世の旅寐かな

口け殻とやらんで死る秋の蟬
着て立て夜の衾も無かりけり
歸り来る魚のすみかや崩れ築
其尤巧妙にして蕙雅なる者は
取りつかぬ力で浮ぶ蛙かな
其尤拙劣にして平淺なる者は

贈新道心
蚊屋を出て又障子あり夏の月
此外禪味を含ませして格調の高きこと去來の壘を塵する者あり。
子規なくや湖水のさゝ濁り
黒みけり沖の時雨の行どころ
水底の岩に落ちつく木の葉哉
の類なり。又輕快流暢の筆を以て日常の瑣事を拈出するは丈草の長所なるが如く
春雨やぬけ出たまゝの夜着の穴
ひまわぐや蚤の出で行く耳の穴

つゝ立て帆になる袖や遠み舟

夜咄の長さを行けばどこの山

屋根ふきの海をねぢむく時雨哉

杯の例あり。又文章の好題目として擇ぶ所のは動物にして文章句中の三分の一は皆禽獸蟲魚に關係せり。是れ即ち芭蕉去來が好んで天象地理の大觀を吟詠するとは大に異なりて文章の一籌を輸する所以亦こゝに在る可し。俳句に擬人法を用ふるは後世に多くして元祿前後には少き様なるが文章は例の動物を取りて擬人的の作意を試みたり。

我事と泥鰌のにげる根芹かな

大原や蝶の出で舞ふ臘月

夕立に走り下るや竹の蟻

啼きはれて目さしもうとし鹿の形

等のたぐひにて是れ恐らくは禪學の上より得來りしものならんか。

東花坊支考

東花坊支考は蕉翁晩年の弟子なり。人と爲り落着奇異敢て法度に拘はらず。芭蕉世に在るの間は吟詠

妙境に到りて他の高弟をも凌駕しいと頼もしく見えたり。然るに芭蕉死して後は自ら門戸を掃へ學識に誇り多才を頼み安りに芭蕉の遺教を稱して數十卷の俳書を著し甚だしきものは自ら書を著し自ら解釋と批評とを加へて以て天下に刊行するに至れり。是に於て其句多く輕佻浮泛に流れて任々芭蕉正風の外に出でしが其極終に美濃派の一派を起し今日に至るまで多少の勢力を有して全國に蔓延せりといふ。支考の性行此の如くなれば其吐く所の俳句も亦一種の理想を含む者十中八九まで是れなり。

月花の目をやすめばや春の雨

鶴に乗る支度は輕し衣がへ

世の中をうしろの鏡や更衣

灌佛やめでたき事に寺参り

魂棚にこちらむく日待つ身かな

名月やけふはにぎはふ秋の暮

一俵も取らで案山子の弓矢かな

暇八や便せは佛に似たれども

此の如きもの數ふるに暇あらず。其

空着せて見ばや月夜の鵜頭花

云ふに至りては理想已に極まりて稍狂に近きものなり。此他理想といふべからざるも其意匠自然に出ずして斧鑿の痕を存するものあり。即ち

梅が香の筋に立ちよる初日かな

野は枯れてのばすものなし鶴の首

二ツ子も草鞋を出すやけふの雪

等の類なり。擬人法はもと理想より生ずるものにして寸草の此法を用ひしことは已に言へり。支考に至りて此種の俳句實に夥多にして動物植物を形容するの慣手段を爲せしが如し。其例を擧ぐれば

花の咲く木はいとがしき二月かな

鶯の肝潰したる餘寒かな

此の目の何か悟りて早合點

片枝に脈や通ひて梅の花

百合の花たゞものあちら向きたがる

物思ひひく鳴く鶉かな

胸に秋のしみたる熟柿かな

節々の思ひや竹に覆る雪

等の如し。又多少の理想なきに非ざるも意匠諧謔に陥りて風雅の趣に乏しきものあり。例へば

蓮の葉に小便すれば御合利かな

牛になる合點じや朝寐夕涼み

尻や鼻を出し行く人はなし

寒ければ寐られず寐ねば猶寒し

の類にして支考が一生の本領も亦こゝに在りしなるべし。されば後來美濃派の起りしも主として此處より入りしが如し。蓋し支考は固より一個の英俊ある俳家たるを失はず。其賦する所稍神韻に乏しと雖も滑稽諧謔の中に一定の理想ありて全たく卑俗に陥るを免れたり。然れども後世無學の俗輩一片の理想無くして此諧謔を學ぶ、俗陋平淺ならざらんと欲するも得んや。支考の多能なる俳句に於て到る處必ずしも前に論じたる境涯に止まらず時として其角去來を學び時として尙白涼菟に擬する者あり。是れ支考の支考たる所以なるべし。其の例

これ迄かくどて春の雪

水澄て初の芽青し苗代田

餅くはぬ旅人はなし桃の花

里の子の森羅る早苗かな

我笠や田植の笠にまされ行く
裸子よもの若ばやらん瓜一つ
初霜や蘆折れ遠ふ置堤
二つ葉や一葉くじけさの霜

志多野坡

志多野坡の俳句は意匠の清新奇抜なるものを取りて作するを常とす故に其句多くは

初午や鏡をくはへて御戸開
苗代や二王のやうな足の跡
郭公顔の出されぬ柘子かな
屋端を一人が覗けば花の山
夕涼みあふなき石に上りけり
落椿餘りもろさについで見る
飛びかへる竹の霰や窓の内
の類なり。其尤清澁を弄する者に至りては

長松が親の名でくる御慶かな
鉢器を取れば若衆ぞ大根引
の如き者あり。其句法の警抜人を駭かす者は

はのくと鴉黒むや窓の春
つしまれて水ものびたる蓮かな
這梅の残る影なき月夜かな
等なり。之を要するに野坡は常に滑稽を以て人頤を解かんとする者の如く其の理想に至りては甚だ低
きかと思はる。偶

葉かくれて見ても朝顔の浮世かな
豆とりて我も心の鬼打たん
等の句われども恐らくは其真面目にあらざるべし。これは戀の句に
振袖のちらと見えけり闇の梅
娘ある隣の衣どうたればや
とあるが如きは淺薄暴露殆んど讀むに堪はず。其理想は斯く低しと云ふも其度量快裕なるは曾て其
家に忍び入りし盜賊を相手に談笑せし一事を以ても知るべく従つて其句も亦紆餘迫らざる處ありて假

合上乗に非るも、蒸風の特色を存して、大に愛すべきものなり。即ち

押して見る山の乾きや露の蓋

食の時皆あつまるや山櫻

静かには啼かれぬ雉の調子かな

猫の戀初手から啼て哀れなり

秋もや、雁かりそろふ寒さかな

此頃の垣の結び目や初時雨

力なや膝をかへて冬籠

等の句を見て其一斑を見るべし。歳暮の句に

年のくれ互にこすき錢づかひ

とあるが如きは元商家に生れたる故に其觀察のこゝに及びしものなるべけれども此等の意匠は其人情を穿つに拘はらず卑俗に流れて偶々嫌厭を生せしむるに足るのみ。蒸翁六感に「かどけたる事野坡に及ばず」とあるは中らずといへども遠からざるの評なり。

武士と俳句

諸侯にして俳諧に遊びし者、蟬吟、猿丸、風虎、露沾、蕭山、冠聖、諸公あり。武士にして俳諧に遊びし者、芭蕉をはじめ比々皆然らざるはなし。されど中に就きて俳諧のみならず武士としても亦名高き人々は、大高子葉、富森春帆、神崎竹平、菅沼曲翠、神野忠知等なり。蕉門十哲の中、性行の清廉と吟詠の高雅とを以て古今に超絶する二家傑、向井去來、内藤丈草も亦武士のはてにして殊に丈草は繼母に孝を盡し弟に家を譲らんが爲に我指に疵をつけ刀の柄握り難き由いひたて、禪門に入りたる人なりとぞ。夫れ風流は弓馬劍槍の上に留らず。雅情は電光石火の間に宿らず。否これらは寧ろ風雅の敵にして、芭蕉も行脚の掟には「腰に寸鐵たりとも帶すべからず惣て物の命を取る事なかれ」といひ、去來も亦た

何事と花見る人の長刀

と咏して人口に膾炙せり。然りとはいへども誠實なきの風流は浮華に流れ易く節操なきの詩歌は卑俗に陥るを免れず。文學美術は高尚優美を主とするものなり。而して浮華卑俗を以て作られたる文學美術はと面白からぬものはむしろ。否これほど世を害するものはまたとあるまじと思はる。後世和歌俳諧の衰へたるも職としてこゝによらずんばならず。享保年間芭蕉を去る事遠からず。而して已に三笠附といふ事もはら行れて一種の博奕となり従つて徳川氏も亦法律を設けて博奕と同じく之を禁ずるに至れり。近時に至り此三笠附なる者は餘り流行せずといへども宗匠のあとつぎも發句の點も皆金錢に比

例する世の中、扱もうるさし。今初めにあげたる數家の俳句を左に連ねて二階からの目録となさん。

しら炭や焼かぬ昔の雪の枝	忠知
馬叱る聲も枯野の嵐哉	曲翠
なんのその鼻も通す桑の弓	子葉
とんでいる手にもたまらぬ殿哉	春帆
鴨啼くや弓矢をすてゝ十餘年	去來
啄木鳥の枯木探すや花の中	丈草

女流と俳句

女流俳句を嗜む者少からず。其の風調亦た一種のやさしみありて句作の強からぬ所に趣味を存すること多く却て男子の拈出し能はざる細事に着眼して心情を寫し出すこと其微に入り以て讀者を惱殺せむるものあり。大凡世の人は女は歌こそよまじはじけれ。歌はひみじうみやびたるわざにて鬼神をもひじぎたけきものゝ心をも和合するものなれどもなまなかに心ひなびて詞もむくつけき俳諧などしたらん女はよるが男めきでめらめらしくなりなんぞやいななる。これ固より一理ある論なれどもそのみ一極にはいふべからず。昔と今とは言語の變りあれば深奥に妻はる公上臈すら古學を修めぬもの

はたやすく和歌をよみたりとくもあらす。その下りのいとなみにひまなききは、歌よむすべし。ねば卅文字を知らぬるはたわきまき、ゆゑなるものは心まかせに俳句など口ずさんどつきくしく興ある樂なるべし。且や古今の相違は言語の止のみにあらず生活の方法眼前の景物まで盡く變りはてたれば日常の事又はそれより起る連想のたぐひも古人の窺ひ得ざる所多し。而してそれを詠み出でんとするには是非とも今日の俗語を用ひざるべからず。殊に女子の目撃する瑣事に至りてはいよいよ之を雅言に求めて得られざるものゝみ多きを奈何せん。たゞ古今に渡り東西に通じて一點の相違なき者は人情なり。故に戀歌の類は必ずしも鄙語を用ふるに及ばずといへども其他は最早之を用ふるの已むを得ざるなり。和歌には伊勢小町相摸紫式部清少納言の如き雲上の女傑輩出せしかども俳諧には上臈なき故に卑俗の二字を以て排し去る者多きはひが事。言葉俗なりども心うちあがりたらんは如何ばかり高尚ならまし。只此評を受くる者は俳諧社會に俗客入り來りて俗氣の紛々たるが爲ならんのみ。

元祿の四俳女

元祿前後の俳諧に遊ぶ婦女子の中、まづ捨女、智月、國女、秋色を以て四傑とも稱すべし。すて女は蕪子花の如し。うつくしき中にも多少の勢ありて、りんご力を入れたる處あり。智月尼は蓮花の如し。清淨潔白にして泥に染まぬ其色淨世の花とも思れす。秋色は撫し子の如し。ゆら／＼と風に立ちのびて

やしらさきいでたる中にくねりならはぬあどけなきに其人柄まで思ひやられてなつかし。園女は紫陽花の如し。姿強くして心おとなしきは俳諧の虚實にかなひ日々夜々の花の色は風情の變化を示して終に閑雅の趣を失はずともいはん。而して四女の中句作には、余は園女を推して第一とす。園女は見識氣概ありて男子も及ばざる所あり。其某禪師に答ふる書の如き會て婦女子の婉柔謙遜なる所を失ふて、唯剛慢不遜なる一丈夫の趣あり。されど其俳句に遊ぶに際しては決して婦女子の眞面目を離れず。蓋し得難きの女傑と謂ふべし。近時の女學生以て如何とす。これらの人々の俳句に就て三四を披萃して左に掲げん。

うき事になれて雪間の蘇葉かな

すて

日くらしや捨てゝおいても暮る日を

同

思ふ事なき顔しても秋のくれ

同

栗の穂や身は數ならぬ女郎花

同

我年のよるともしらす花盛

智月

有と無と二本さしけりけしの花

同

登に死ぬ佛の中の佛かな

同

木枯や色にも見えずさうりもせず

同

井戸端の櫻かぶなし酒の

歌色

戀せすは猫の心の恐ろしや

同

雉の尾のやしらさきはる望かな

同

佛りきて心かかるとはさす我

同

山松のあはひくや花の雲

そ

鼻紙の間にしほむすみれかな

同

あるほどのだてしつくして紙衣哉

同

菅麻のまんだらを拜みて

同

衣かへ自ら織らぬ罪深し

同

加賀の千代

加賀の千代は俳人中尤有名なる女子なり。其の作る所の句も今日に残る者多く俳諧社會の一家として古人に譲らざるの手續は幾多の鬚髯男子をして後に瞠若たらしむるもの少からず。俳諧の上にも男子にあらざれば言ふべからざるごとく女子にあらざれば言ふべからざるごとくあり。今千代の句を以て兩者を對照するも亦た一異なるべし。

母方の紋めつらしやきそ始

山 蜂

我福の鳥も遊ふや着衣はじり

千 代

前者は男にして始めて言ふべく後者は女にして後ち作り得べきものなり。

馬下りて若菜つむ野を通りけり

一 具

仕事ならくるゝをしまじ若菜摘

千 代

妻にもと幾人思ふ花見かな

破 笠

足跡は男なりけり

千 代

子もふまげ枕もふまげ時鳥

其 角

男さへきかれぬものを郭公

千 代

折からの嫁くらへ見ん田植哉

能 言

けふばかり男ぞつかふ田植かな

千 代

早乙女に足洗はするうれしき

其 角

早をどめや若菜つみたる連もあが

千 代

出女すの口紅をいしむ西へ瓜かな

女 考

紅さいた口紅もあはれし清水

半 代

余所目に見る支考の句はわが身の上を思ひかゝしたる千代のはいとほし。

白菊の目だたて見る塵もなし

千 代

白きくち紅さいた手のあなほしき

千 代

芭蕉は國女をゆめぞ吟じ千代は己を卑下して詠す。

千 代

妹なくさうたしね悔ゆる火燧哉

千 代

尼になりしとき

千 代

髪を結ふ手のひまわいでこたつ

千 代

時鳥

連歌發句及び俳諧發句の題目となりたる生物の中に於て最も讀みいでられたるものは時鳥なり。此時鳥といふ鳥は如何なる妙音ありけん昔より我國人にもてはやされて萬葉集の中に入りたるもの既に百餘首に上る位なれば其後の歌集にもこれを二なく目出度ものに詠みならはし終には人數を分けて初音の勝負せんとて雲上人の時鳥きくにと出で立てるとなど古きもの本に見えたり。されば其餘流をうけたる連歌俳諧に此題多きも尤の譯にて若し古今の發句の中に於て時鳥に關したるものを集めなば恐らくは幾萬にもなるべからんと是はとるなり。支那の詩にも子規を詠したるもの多けれども多くはこれ

を悲しきものになせり。西洋の詩にも我子規に似たる鳥を詠みたるものありてこは昔其聲をうれしきかたに聞くが如し。おはれ果報なる鳥よ。なの一聲は命にもかへて聞かんことを思はれ千餘年前より今日に至るまで幾千萬の詩人をして其の腦葉を絞り出さしめたり。世の鳴蛙蟬蟬果して何の顔かある。はた空しく川柳都を逸の材料となりて一生を送りする阿房鶴の面の皮のあつとよ。

時鳥に關する古人の發句十數首をあげれば

時鳥なかに初音ぞめづらしき

山彦の聲よりかくや郭公

ほととぎす思はぬ波のまがひ哉

鶯の拾子ならなげほととぎす

郭公大竹原をともる月夜

時鳥くぐとて麻入りけり

ほととぎす時や澗水のさゝ瀧り

野鴨なくや雲雀の十字字

ほととぎす雲踏みはさじく

目には青葉山ほととぎす初聲

一 遍上人

宗 碩

宗 牧

守 武

芭 蕉

涼 菟

丈 草

去 來

露 川

素 堂

子規二十九日も月夜哉

川舟やあとへ成たる郭公

子規啼て江上數聲青し

この雨はのつ引ならし時鳥

蓼 太

士 朝

遣 彦

一 茶

扱はあの月がないたか時鳥

時鳥の句の中に世人の尤も能く知りたるものは

扱はあの月がないたかほととぎす

といふ句なり。此句の初五文字を「一聲は」として或は芭蕉の作といひ或は其角の作といふは杜撰なる俗説なり。俳家奇人談には瓢水の作なりといひ温故集に漢風とあれば漢風は瓢水の別號かといへり。余近頃翠堂の著せる真木柱(元禄十年刊)を見るにはじめに中古の發句として擧げたる中に
扱はあの月がないたか郭公
とあり又終りの方に
舟のつくまであとを見かへる

一 三

扱はあの月が啼たかほととぎす

露 風

中興の發句を取合たる可謂奇妙云々
とあり。されば此の句の作者は二三にして蕪風は附合の節に此成句を應用したる者なること明らかし
そはとまれ此句は人口に膾炙して後徳大寺の和歌を翻案して更に巧妙なりと稱ふる人も少からず。然
るにさき頃宗牧發句帳を繕きしに

月や聲きいでて見つゝる郭公

といふ句を見つけたり。之を前の句に比するに其調は連歌と俳諧との區別あれども其命意は則ち符を
合すが如し。其調類なるかはた暗合なるかは知るによしなけれども百餘年前に在りて已に此句ありと
すれば前の句が得たる名譽の過半は之を宗牧に譲らざるべからざるなり。文學に限らず天下此の如き
たぐひ多し其意を雪き其微を闡くは學者の義務なるべし。洋書を抜萃翻譯して著作と號し古書を翻刻
出版して我編纂といひひいて初學者田舎漢を感はさんとする當時の紳士學者は果して何する者ぞ。

時鳥の和歌と俳句

伊勢の勾當杉田望一は盲人にして俳諧の達者なりしかども寛永中に没せし人なれば其作亦幼稚にして
今日よりのべこれといふべきものなし。只其

とれとさく空耳もかなほどりきす

といふ句ばかりは後世にてもほむるものなるがこは後撰集の歌に

時鳥はつかなる音をきゝそめて

あらぬもそれとみほめかれつゝ

伊勢

とあるより得來りしものなるべし又後世の句なるが

時鳥なくやこぼるゝ池の藤

抱備

箱根山

郭公人も名のりをしつゝ行

雨考

といふあり。前者は家持の

はるゝに鳴く時鳥たちくと羽ふれにちらす藤波の花なつかしみ云々

といふより來り後者は千載集中の

あふ坂の山時鳥名のるなり

關もる神や空にとふらん

師時

とあるより脱化したるものなり。又近頃出版せしある俳書を見しに

時鳥初聲きけばめづらしき

友まぢえたる心地こそすれ

といふ千薩の歌を取りてか

よい友にあふた心地よ時鳥

とありしが如きは拙の又拙なるものなり。發句も俗客又は無學者の惡戯場となりしより愈々出で、愈々陳腐なるものとはなれりけり。

初嵐

一年の内風多し。春風はこそくられるが如く秋風はつめらるゝに似たり。こそぐられてははしだらなく睡り倒れつめられて後は身置りんとしまりて驚むる所ろあり。况んや初嵐野分二百十日なんどありて秋の天氣は男の心にもたへたるをや。二百十日の頃は稻つくる作男ならぬも米あきなふ商人ならぬも氣象臺の役員ならぬも如何にくと空のみ打ち仰ぐ夕暮に一點の黒雲丑寅の方に出沒せしが見るく墨を流してはや頭の上に見あぐる程にもなりぬ。何程の事があらんと枕に就きしが雨戸烈しく吹きはなす音に目覺めて

山風に野分かさなる寐覺かな

奇淵

と驚きしも五風十雨順を失はざる大御代の癖とて

朝露はさりげなき夜の野分哉

宗長

冷よと朝日うれしき野分かな

支考

と晴れ渡りて嬉しや胸のすきたる心地なり。

君か代も二百十日はあれたけり

萩

我番窓の下に竹垣にそふて一本の萩生ひひろがりて軒端近く風に打ち返さるゝさまけふや花咲くらんあすや花亂すらんと朝な夕な打ち見やる程にそれかあらぬか置き亂す白露の間より紫のはのかに見えそむるに

はつくと花になるなり萩の露

月居

といふ句ぞまづは思ひ出されける。うれしさに庭下駄穿ちて近より見れば今日咲きそめしと思ひしに

萩の花咲くといふ日は亂れけり

禹洗

机の下に歸りてしばしは書讀みしむつしかに又萩の方のみ見られて

白露もこぼさぬ萩のうねりかな

芭蕉

實によくも萩の風姿を形容したりけりと坐ろに歎賞せらる。翌朝まだきに起き出で、見ればけふもや眞盛りなるらんと思ふ許りなるに

あたりへもよられぬ萩の盛りかな
よらば散らなん風情なり。

序 忠

雞の引き出す萩の下枝かな

聞 更

雞なども出でよど打ち興する折から此頃の癖とて小雨そほふりて小庭の秋も何となくものさびたり。
こなたの垣ごしには隣の白萩いと氣高く咲きぼるゝさま

白萩や露一升に花一升 黎 太

の句意にもかなへりや。兎角するうち我魂はこゝにありて向島の百花園、龜戸の萩寺とさまよひあり
けば

泥水の上に亂すや萩の花 甚 虬

と口ずさまれ途には曾て遊びにし大宮の公園、榛名山上の草原など思ひつゞけられて

草刈りよそれが重いか萩の露 李 由

と吟ずれば刈草高く背負ふたる翁もあどにつらく重も共にふり向きてはゝるむ心地ぞすなる。

ぬれて行く人もをかしや雨の萩 芭 蕉

萩原や花とよれ行く爪さがり 曉 盞

と隔すれば管笠打ちかたげて萩薄を押し分けく行くさまけふの雨にたぐへて目の前にありくど見

もるが如し。はてはまた見ぬ玉川、宮城野まで思ひやられて。

花を重み萩に水行く野末かな 紹 巴

白萩や細谷川の浪かしら 羅 人

とは何處のけしきにやあらん。はた旅中に病んで

行きくつて倒れふすとも萩の原 曾 良

と詠じたる人の心まで思へば萩ほどやさしく哀れなるものはまたとあらざりけり。

女郎花

秋の七草は皆それくの趣あるが中に女郎花ほど淋しく哀れなるものはあらじ。されば古來歌人もい
ろくに讀みならひ俳人も多く詠じ出せるが其たけたかく伸びすぎて淋しく花のさかりたるを見て

ひよろくと猶露けしや女郎花 芭 蕉

身の上をたゞしはれけり女郎花 涼 菟

といひ其實に咲きいでたる色をめでしは

いたづらの色を去りけり女郎花 龜 世

とよむ。又女郎花となんいへる名も聞きすておたくて

女郎花 都はなれぬ名なりけり

士 朝

と吟せし人の心多きよ。そこらあたりの野も何となうなつかしく覺えて

井戸の名も野の名もしらず女郎花

蒼 虬

とは風雅の本意なるべく

撫でられて牛も眠るやをみなへし

百 花

とよみたらんを思へば落ちにきと隠れし法師も物かは。風のそよ吹く毎に我れさきに搖きそめし女郎花の風静まりて後までも猶揺れ残るわびしよ。

吹くかたへ心の多し女郎花

涼 袋

松岡をかつきて臥せり女郎花

曉 臺

何事のかふりくそ女郎花

一 茶

くねるといふ名は男の喜ぶべきを

身を耻ぢよくねるとあれば女郎花

秋 色

と誓りたる秋色の穂の高さは此一句にても知られたり。

わがものに手折れば淋し女郎花

藜 太

鬼角して一把になりぬ女郎花

蕪 村

折り易きものは折らるゝ世の慣ひとはいひながら折られて喜ぶ花もあるべし。わけては

原中にひとりくるゝか女郎花

秋 瓜

暮たがる花のやうすや女郎花

文 角

と夕暮の魂を見つけたる詩人の多情には花も恥ぢらひてあちらむくなるへし。

芭蕉

こゝに芭蕉といふものあり。木に似て枝なく草に似て遙かに高し。幹は大きやかなれど梢枯れにはいち早く枯れて形ものうく葉は廣げれといつしか雨に破れ風に吹かれて秋の扇にさも似たり。山寺の庭に植ゑられて老僧坐禪の夜深くれば雨の音物すこく隱栖の音窓にとふて閑人棋を圍むの時月出で涼影柀上に搖く。秋草は皆さいやかに花咲くものはかりなるに誰かは此芭蕉を取りて秋の季には入れたりける。むかし桃青深川の草庵に芭蕉を植ゑて其雅観となせしより以來ばせをといへば何となう尊とくかしこきやうに思はるゝも此草の幸なりや。されば古今の俳人多く芭蕉を詠し出だせるが中に

秋風に巻葉折らるゝ芭蕉かな

加 生

といふ句もさることながら

芭蕉葉は何になれどや秋の風

路 通

と歎したる手箱は又一きはにて路通一生の秀逸は此句にとりめたりとかや。

風の夕芭蕉葉掲げて通りけり

保吉

雨の日や門さげて行く燕子花

信徳

より脱化し來りたれど猶見るべき所なきに非ず。

稻妻の形は芭蕉の廣葉かな

一風

といふも奇なれども

稻妻は棕櫚や芭蕉のそよぎかな

巨海

と詠みしは平穩にして更に妙なり。さるを又

はら／＼と稻妻かゝる芭蕉かな

樽堂

といひかへたる器量をさく芭蕉翁の遺響あり。

垣越しに引導のそくばせをかな

下枝

芭蕉葉や在家の中の淨土寺

露川や下枝の精柏を翳めたり。黎太更に之を翻案して

露川

七堂の外に大破のばせをかな

露太

とせしは奇に過ぎて狂体に陥りたるか如し。

芭蕉葉や打ちかへし行く月の影

乙州

とは月と風との景色を言ひおほせ

雨蛙芭蕉にのりてそよぎけり

其角

とは異な處を見付けられたり。

染かねて我と引きさく芭蕉かな

碧太

裏打のしたく成たる芭蕉かな

碩布

二句稍奇抜に過ぐれど新意を出だしたるは妙なり。

俳諧麗の葉の評

撫松庵鬼姿なる人あり一番を著して「俳諧麗の葉」といふ。之を一讀するに終始日本古代の文法論を述べて俳諧上に應用したるなり。蓋し古より俳人古學を脩め文法を知る者少く随つて文法語意の點に於て誤謬をなす者比々皆是なり。況んや近世の俳人漫に自分免許の宗匠を以て愚者を惑はす者をや。若者こゝに見る所ありて此文法論を著し今時の俳人の迷夢を破り且つ古の俳書の杜撰を罵る。卓見臨みりと謂ふべし。而して文法に至りては余も無學の一人あり。故に敢て之か批評を試みず唯著者に向つ

行く年や親に白髪を隠しけり
のやも同じ事なり。別に變りたる意義あるに非ず。又第二百二十二頁に

鳴く鹿もさかるといへば可笑けれ。

四 雪

のけれを攻撃しあれどもこれは俳諧の上用ふる一種の意義を含むものなればあながち攻むるには及ばざるべし。況んやこの係りありて結び語なき古例さへある位なれば其係り語なくしてけれの結語ありども左迄珍らしきことに非るべし。又第二百二十三頁より以後に新定十体なる者を論じたり。其論は皆文法に關する美辭學中の一小部分なれば余はこゝに之を講究するの勞を取らざるべし。

「俳諧麓之榮」を把りて之を讀むにはじめに厭倦を生じはては嘔吐を催さしむるものは作例として擧げたる俳句の甚だ拙劣淺陋なることなり。蓋し此書は普通の俳諧の如く古句を引きて例となさず盡く今人(著者をも含む)の作を列ねたる故に予ありける。同書凡例に曰く作例は、今少シク思フ所アレバ故意ニ近世ノ諸名家及余ガ社友ノ佳什ニテ法則ニ適合スルモノヲ以テ之ニ充テタリ云々。余等其何故に斯く近人の句計りを擧げたるかは知るに由なれども思ふに古人の作例許りにては文法の變化の例として一々之れを擧ぐるに便なればなるべし。さるにても今少しは句の選ひ方もあるべきを初學の楷梯とはいひながら餘りなると思はるゝなり。余は初めに此書を読みし時は故意に今人の拙劣なるを示さんとの著者の諷刺に出でたるものならんと思ひしが凡例を再讀して佳什云々の字あり。且

つ作例中著者自身の俳句さへあるを見て始めて其選び方の良面目なるを知りたり。余は作例中其儘に可なる者を求めしに二十餘句を得たり。若し夫れ秀逸なる者に至りては一句だも見出すと能はず。又「拾遺金玉」と題して擧げられたる諸作家の句にても過半は平均凡調のみ。然れども初學の余輩妄りに冒評を呈して大家を褒貶せんはあたらず罪つくるわざなれば一旦は思ひ止らんとせしむ人の勸めによりて次に一斑を論ずべし。之を要するに著者は文法に精しき人なるべし。而して俳諧の趣味を解し得るの人ならざるが如し。

「俳諧麓の榮」の末に「拾遺金玉」なる一節あり。蓋し方今大家の名句を拾ひ集めたるの意なるべし。されども余輩の愚見を以てすれば善にも棒にもかからぬと云ふべき者だに少からず。例へば

赤蕨のかしこまりけり神の前

夏の月頻りに出たうなりけり

征暗にいよく春の待たれけり

はらわたにはろりと染みぬ桐一葉

春風のあちはひ知りぬ東山

花の山日の永いでもなかりけり

頭巾きた人さきたちて柳橋

等の如し。其他發句といへばいふものゝ發句とも何ともつかぬ者亦少からず。

行燈もしたし夜長のふみ机
朴訥は仁者に近し毛見の衆

右二句の如き一は釋念の詩を翻譯し一は論語の語を應用したるまでにて何の手柄もなし。

こゝろ練る恋や木の葉の障る音

黒髪の亂れはづかし朝さくら

義にはてし調體まつるや枯澤

南朝の御運なげくや格のぬし

右四句の如き月並社會の俗關に落ちずといへども亦意到りて筆到らざるものなり。

戸の透に簾かけ替へて格火哉

「かけ替へて」の語巧を求めて却て失す。「押しつけて」等と改めては如何。

餘の木曾手持無沙汰や花盛り

「手持無沙汰」とは尤拙劣なる擬人法にして此類の句は月並集中常に見る所なり。故に余は私に之を稱して月並流といふ。余曾て句あり

大かたの枯木の中や初さくら

凡爾見るに足らずといへども猶ほ或は手持無沙汰のいぢみに勝るべきか阿々。

初秋のくるやまばらの松林

霜と幽趣あれども惜い哉句法備らず。拙句甚だ相似たる者あり録して一察を博す。

行く秋やまばらに見ゆる竹の藪

余「拾遺金玉」を探りて秀句五首を得たり。即ち

から草のかれく淋し薄蒲團

月花の遊びはじめや歌がるた

山畑や雲退くあとに蕎麥の花(其角より来る)

行く秋や籠に残りし虫のすね(荷分より脱化す)

白魚とはこよなき露の狭物かな

或は奇警或は茶動皆老練の筆なり。余輩後進の及ぶ所にあらず。(壺川の句中「白魚とは」の「と」字除きたるものなり)

發句作法指南の評

近頃其角堂機一なる宗匠あり。發句作法指南と云ふ一書を著して世に刊行す。余之を讀て一讀するに秩序錯亂して條理整然ならず唯思ひ出づるがまに〜記し付けたるが如き書きよりは猶明治以前の著書の跡に於て今日之學理發達したる世に在りては餘り珍重すべきの書にあらざといへども此著者に於て余が想像するか如く明治以前の教育をのみ受けし人ならしめば余は此書を贊美して一讀の價値を有するものなりといふを憚らざるなり。蓋し今日の如く腐敗し盡せる俳諧者流の中より此一人現れ出で、同學者の汚點と淺識とを指摘したるの勇氣と見識とは局外者の萬言を敗するに勝りて愉快なるを覺ゆるなり然れども之を讀んで猶不満足を感ずるの箇處多きは勿論の事にて之を詳評するに勝らずといへども一讀の意思ひあたりしとのみを擧げて著者の教を乞はんと欲するなり。

此書の始に俳諧の起原を説く中に「連歌は詞を和歌に取れる故(略)只中等以上の社會にのみ行はれしを我正風の祖師芭蕉翁大にこゝに慨歎する所ありて」云々と云ふは順序を轉倒せるものにて連歌を俳諧に變したるは芭蕉にあらざして貞徳にあること勿論なり。されど後段に猶芭蕉の意向を述べて「今の俳諧の如きは作意になれる者のみれば自然の妙は絶て無き者なり」と云ひたるは確論にして且つこれによつて觀れば前段の誤謬は著者の誤解にあらざして敘述の粗漏に出づると明らかし。又著者は「俳諧は滑稽なり」と云ふ釋義に拘泥して故らに嚴謹に傾きたる俳句を引用して例となし且つ其主旨を演譯して「蕉翁が晋子を賞せられしも此連の第一義と立たる滑稽の他に拔でたる故ならん」と云ふに

至りては其論甚だ妙なるが如しといへども終に我田へ水を引くの諷りを免かれず。其角の滑稽に妙を得たるは眞實にして著者の言當れり。唯滑稽を以て發句の本意とするに至りては其説甚だ誤れりといふべし。然れども著者の滑稽の意を解すること太た曖昧にして時として意を異にするなきかの疑を存せざるを得ざるなり。

發句作法指南に、發句の調格と題して、其中に「發句は總に十七字なれば(略)和歌の如くひたすら優美なる姿を述る能はざる者あり故に和歌よりは一層區域を弘めて俗言平語を交へ嫌ふなきなり。かれは姿は第二義として感を第一義とす。さればとて優美を嫌ふ者と思ふべからず」云々とあるが如きは至當の論なり。然れども姿の亂れたる例として。

枯枝に鳥のとまりけり秋のくれ

芭蕉

ひなのさま宮腹よにまし〜ける

其角

柳散り清水かれ石どころ〜

蕪村

といふ字餘りの三句を擧げたるは未だ以て讀者の心を飽かしむるに足らず。何となれば姿即ち句調の弊惡は必ずしも字數のみに關せざるなり。若し句調は字數の上のみありとせば三十一文字に限りたる和歌の上に姿を論ずるの必要も無く随つて定家卿杯が姿に就きて喋々と言葉を費さるゝ事も無き事なり。和歌既に然りとせば發句亦これなくして可ならんや。例へば

川中の根木によろこぶ涼み歌
といふ句を試みて

六十
芭蕉

よろこんで涼むや川に出る根木
といひかへんか。其心は同じ事なれども其の格調に至りては天壤の差あること勿論なるべし。又
歌體にこまる涼みや石の上
正秀
といふ句を

石の上もく禮こまる涼み歌
と改りなば如何。僅かに言略の位置を顛倒せしに過ぎざれば、猶其句調は原作に劣るを見るべし。近
時の書生にして俳諧を學ぶ者皆意到りて筆隨はざるの憾あり。蓋し其思想は豊富なれども未だ格調に
於て到らざるものあるに由らざるを得んや。

「發句作法指南」の中に「發句は雅調と俗調の別あり」と題して其中に「卑俗とは詞の上をいふにはあ
らず心の卑俗なるをいふ、(略)其の卑俗の調といふは綜合は

家内皆まめでめでたし歳の暮

といふる類是れなり、此句の如きは詞の上卑しといふべき處は露ばかりもなければ其心は無下に淺ま
しき俗調なり、此句を或人が

何事もなきを實そ歳の暮

と直したるは雅致淺からず、姿もいと高し「云々とあり。余は一讀して稍怪しむ所あり。乃ち再三之
を讀む。而して終に其意を得ず。初めに心の卑俗といふるは善し。然れども家内云々の句を何事も云
云と改めて其心に幾何の差異ありや。余は兩句を比して其心は全く同じく只其姿變せりといはんぞす
るなり。又其姿は執れが可なるといふに著者は「姿もいと高し」と判斷して後句を譽められたる余は
後句に比して寧ろ前句の眞率なるを取る者なり。(尤其句の凡俗なるはいふまでも無し)此の如き甚だ
しき過誤は後生を誤ること多からんに注意ありたき者なり。又同書に「發句の沿革」と題して「發句
の世に行はるゝ事、凡そ二百餘年、其間を大別して三とみなさん守武宗鑑より貞徳季吟に及ぶ之を其
一とす、「云々と説き出したり。然るに守武宗鑑は今を去る事大略三百五十年位前の人なれば二百餘年
とは痛く違ひたり。又時代を三に分つとありて第一のみを擧げ第二第三の區別無きは不審なることな
れど大方は活字の誤植か校正の粗瀆によりしなるべし。さはいふ數字の誤謬程害の多き者あらざれば
著作編輯に従事する人は尤謹まざる可らず。又同書に發句の切字并にてはをを論して「此發句の切
字といふは一種格別に設けたるものにて歌と同様に論ずべき者に非ず」と云ひしは卓見なれども「て
に」と唱ふる者は自ら其詞に備りてある故、真心のまゝに云ひ出れば知らずく自ら叶ふ者なり」と
いひ「格」といふ者を設け分らぬ者は皆此部にあて入れるなど笑止の限りなり、(略)格に變あらは格に

「俳諧麓菜」と共に兩極端に走る者なりと云はんとす。

「發句作法指南」の中に「發句の感あると感なき」と題を掲げて白全といふ人

背向けて眠り催す 掃火かな

と作りしをある人一讀して扱もあぶなき句を詠まれたりといへば白全忽ち悟りて

背向てあぶながらるゝ掃火哉

と改めたるを記載しそれにて一座の秀吟となりし由を言ひたり。然れども余が見る所を以てすれば後句稍曲折を求めて却て卑俗に陥り一の妙味なし。寧ろ前句の淡泊無味なるこそ面白かるべけれど思ふなり。

同書に「蕉翁の六感」と題して其角、嵐雪、去來、丈草、支考、野坡の六門第の句を芭蕉の感賞せしよし記し且つ其句を掲げたり。こは誰が言ひ傳へしことか知らねども蕉翁の感賞せりと云ふは誤謬なるべし其證は去來の部に「實なること去來に及ばず」と書きて

應々といへど叩くや雪の門

去來

といふ句を載せたり。然るに去來の此名は蕉翁歿後の作なる事去來抄に詳なれば爰に去來抄の一部を抄出して示さん。同書に曰く

丈草曰此句(去來が雪の門の句なり)不易にして流行のため中を得たり。支考曰いかにして斯安き筋よりは入たるや。正秀曰たゞ先師の聞給はざるを恨るのみ。曲翠曰句の善惡をいはず當時作せん人を覺えずといへり。其角曰眞の雪の門也。許六曰尤佳句也。いまだ十分ならず。露川曰五文字妙也。去來曰人々の評亦おのゝ其位より出づ。此句は先師遷化の冬の句なり。其頃同門の人難しと思へり。今は自他ともに此場にとまらず。

これを讀めば芭蕉の此句を聞くに及ばざること明けし。又右六感の中に支考の句として蚊屋を出て又障子あり夏の月

を擧げたり。されど此句は風俗文選に載せたる「贈新道心辭」といふ文の終りに附けたる句なれば丈草の作なること論を俟たず。恐らくは著者誤りて丈草と支考とを入れ違へたるものには非るか。

「發句作法指南」の中に「家人擧て風雅」といへる一項ありて「世に俳句を好む人多しされども夫之を好むも妻はざる心なきあり父之を好むも子其道を知らぬあり」云々とことごとく説き出しながら其例として儼かに曲翠一家のみ擧げたるはいと飽き足らぬ心地すれば今余が知るまゝに之を補はんぞ欲すれども盡く列擧せんは餘りくだしくしければ其有名ならぬ者と且つ疑はしき者とを闕きてありふれたる者のみを擧げんとす。先づ其父子共に俳句を嗜む者は左の如し。

紹 巴……………玄

仲 仍

智 倫 里……………來

州 川

元日や神代の事も思はるゝ

守武

元日の見るものにせん不二の山

宗鑑

草も木もめでたさなりけさの春

貞徳

ささのぼれ隠岐の鮎くひに都鳥

貞室

これはくさばかり花の芳野山

同

等の如き延寶以前の各句を擧げざるは餘りありふれたりとてわざとせし事にや如何。又

ねふらせて後ひ立てよ花の雨

貞徳

と云ふ句を評して「此句は子を設けたる人にと端書あり、此ねふらせてといふ一句家に嬰兒を養育する情を盡せり、(略)夫れ嬰兒は乳汁の養ひ足れば眠る、若しいさゝか肥ても不足すれば眠り得ぬのみにもあらず種々の疾病是れより起り、よし辛に死せずとも生涯多病の者となる、此句は之を思ひて春時花を催す雨を乳に比していへる凡骨にあらざるなり」と長々しくいはれたり。されども余の考にては是れ大なる誤解なりと思はる。評者は「ねふらせて」を「眠らせて」と解し「雨を」に比したるが如く見ゆれども余は「ねふらせて」は「瓶らせて」と解し「雨」は「飴」にかけたるものと思ふなり。即ち飴をねふらせて養ひたてよといふ事を花の雨に取り合はせたるものなるべし。總て貞徳時代の俳句は發音の同じきものたよりて他の語をかけるが通例の詠み方にして唯其物に類似の點ありて雨を乳に

比するが如き事は餘り見當らぬなり。俳句に限らず總て詩歌文章を解するには其作者と其特性と其時代の風調とを知らざれば大なる誤謬を來たすは常のとなり。「發句作法指南」に芭蕉句解を作りて

行く海や鳥啼き魚の目は涙

芭蕉

鯉汁や鯛もあるのに無分別

同

七月や六日も常の夜には似す

同

あかくと日はつれなくて秋の風

同

の數句をも名吟の如く評し殊に秋風の句を取りて劇賞せしが如きは其處を得ざるなり。芭蕉如何に大俳家たりしとも其俳句皆金科玉條ならんや。又

青くてもあるべきものを唐辛子

芭蕉

といふ句を解して「唐辛子は青くても辛き者なれば青くてもあるべきに、さも辛さうに燃たつ如く赤くなる事よと飽まる辛き事なるを言ひ顯したる處」云々とあれどもこは全く反對に誤解したるものにはあらざるか。愚考によれば此句の意は「唐辛子は固より辛き者なればせめて青きまゝにあらば目にも立たずしてよかるべきになまじひに赤くなるが故に人の目にも立つなり。目に立つ程うつくしければ甘くもあらんかと思へばさばなくて甚だ辛き者なる故に其赤き色に染まるだけが憎らし」となる

し。若し單に辛き形等のみせんば「わろへき者」の隨し方ゆるやかに聞とて面白からざる
體に覺ゆ。

又同書其角傳の終りに

同(寶永)四年二月青流病を草庵に訪ふ

春暖閑爐に坐の吟とて

露の 曉さもしきりくす

此句解し難きよし世上には云へと去來並に支考の評に云々

とあれども去來は既に寶永元年に死したれば此の寶永四年の句を評すべきよしなし。とは何かの間違
ひなるべし。

又同書の「或俳書にてこれをさへる」と題せる一項は九頁の長きに渡りながら其の解説甚はだ必要な
らず。

「陣中」は便りも無用とかたくなひつけ置たるに「略」これもてはをのけて「陣中たより無用かた
く云ひつけ置たる」(略)かくして聞ゆ(きか)略)

といふが如き解釋にも及ばざる事となくつともなく例を引きて無用の辯を費したる實に見識に類する
ものにして餘り「は餘り」といふこと。

又同書に諸家の略傳を叙し又は略評を下す處多くは俳家奇人談の文章を取りて處々助辭接續辭杯を備
かに書き替へたり。古書を其儘採り用ふること既に見識なきが如くなれども其文を全く引用してこれ
は何の書によれりと明言し置かば固より何の罪も無き事なるに其文章の大方は採用しながら處々の言
語を書き替へたるが如きは古文を剽竊して己れの文と偽り稱するの嫌疑を免れず著者の意必ず此の如
くならざるべけれど少くとも其不注意の罪は之を負はざるべからざるなり。猶此外多少の瑕瑾多かれ
ども一々之を指摘するも煩はしければ其評論は止りつ。

明治廿六年五月二十日印刷
明治廿六年五月廿一日出版

兼著作
發行者

愛媛縣士族

正岡常規

東京下谷區上根岸町
八十八番地寄留

印刷者

秋田縣平民

佐々木正綱

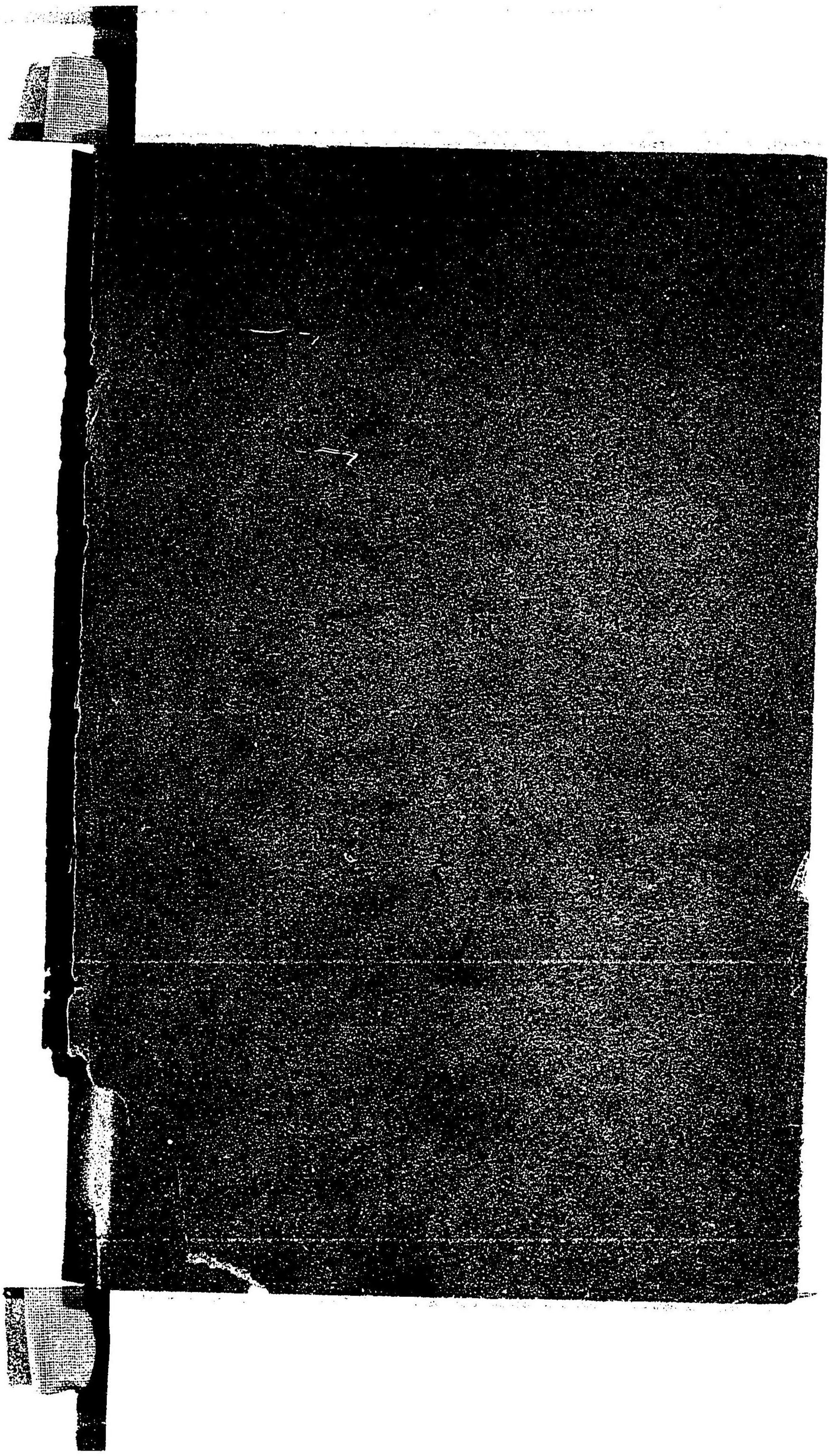
東京神田區雉子町
三十二番地

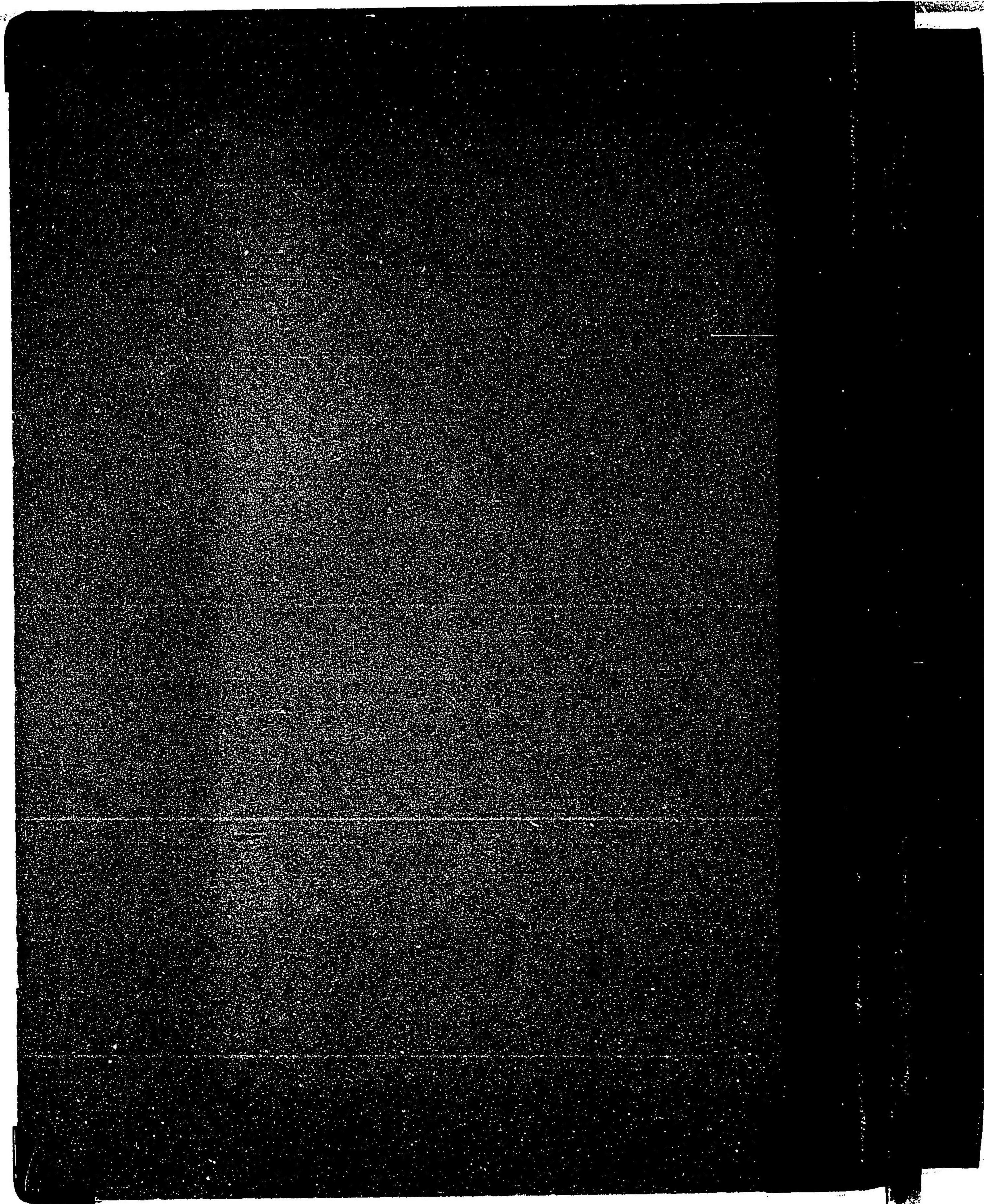
印刷所

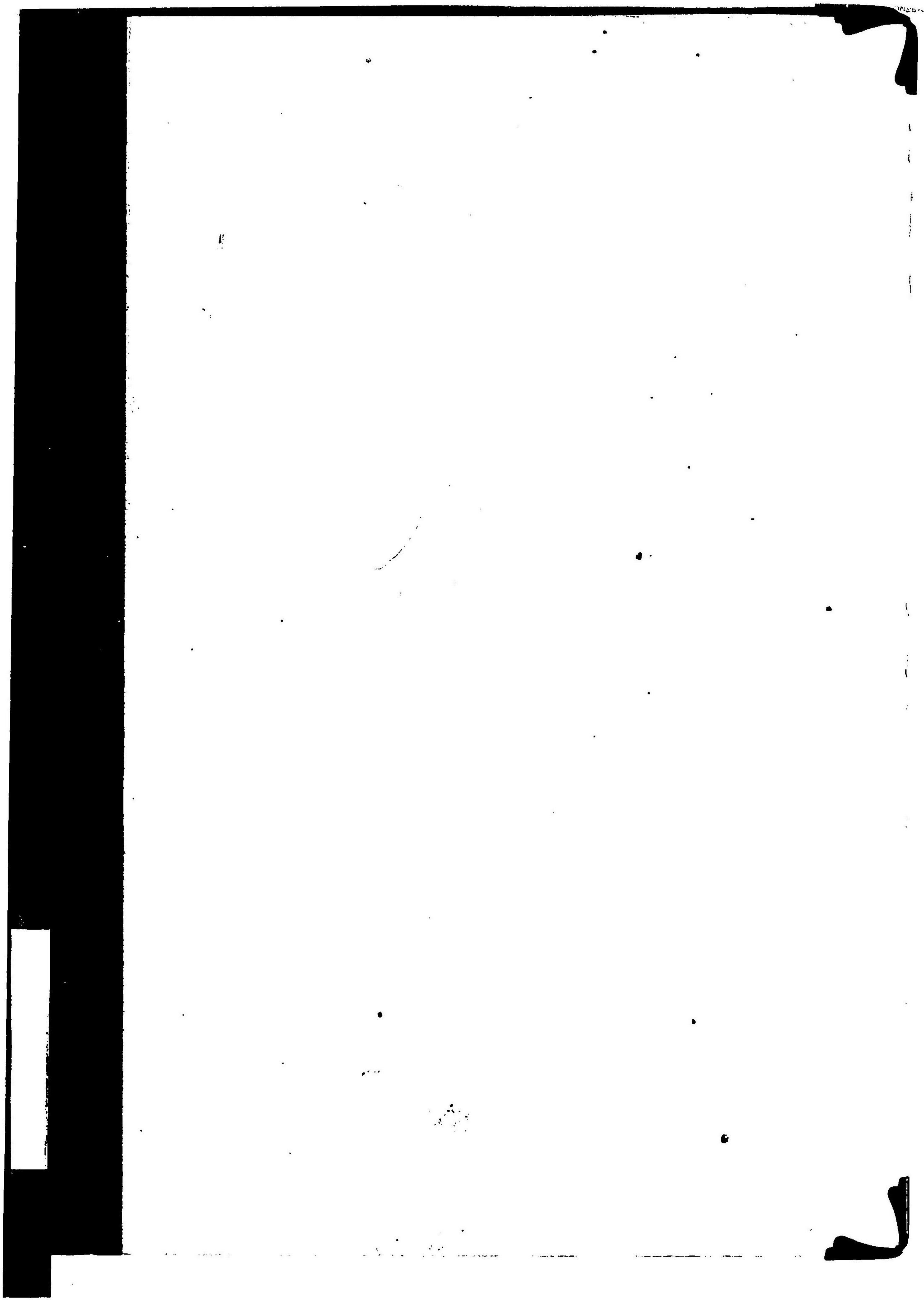
日本新聞社

東京神田區雉子町
三十二番地

13







911.304

M214d

瀬祭書屋俳話

国立国会図書館

087184-000-5

911.304-M214d

瀬祭書屋俳話

正岡 子規/著

M26

DBE-0378



